

タイトル…『ファニーたい焼きトム54  
グリーンカレー』

登場人物…

•  
トム（30代前半・男）…『たい焼きト  
ム』の店主。陽気な米国人。

•  
魚住（20代前半・女）…『たい焼きト  
ム』のバイト店員。真面目で心配性。

•  
•  
•  
お客たち（複数人）…たい焼き屋を  
訪れる人々。様々なリアクションを  
見せる。

• カレーの達人（謎の男）…突如現れたカレーの専門家。厳しい評価を下す。

---

第一幕：グリーンカレーたい  
焼き誕生

（日本・東京の下町。『たい焼きトム』の  
店内。香ばしいたい焼きの香りが漂い、  
トムがカウンターの奥で焼き台に向かっ  
ている）

トム「OK、魚住！今日の新作はこれだ！」

（トムがドン！とカウンターに置いたの  
は……グリーンカレーの鍋！）

魚住「ちょっと待ってください。これ、  
グリーンカレーじゃないですか？」

トム「イエス！今までにない、エキゾチ  
ックでスパイシーなたい焼きを作るん  
だ！名付けて……グリーンカレーたい焼  
き！」

（トム、興奮気味に試作を開始。たい焼  
きの型に生地を流し込み、具材を投入し  
ていく）

魚住「えっ、ちょっと待ってください、  
鶏肉も入れちゃうんですか?!」

トム「もちろん!ジューシーなチキンと、  
濃厚なココナッツミルク……うおお、こ  
れは絶対ウマイぞ!!」

魚住「(困惑)いやいや、たい焼きって  
普通甘いものじゃ……。」

(トム、ニヤリと笑いながらひっくり返  
す)

トム「甘いものだけがたい焼きじゃない!  
俺たちは、たい焼きの可能性を広げるん  
だ!!」

(試作が完成。カウンターに並べられた  
『グリーンカレーたい焼き』から、スパ  
イスとココナッツの香りが漂う)

魚住「……まあ、食べてみないと分かり  
ませんしね。」

（恐る恐る口に運ぶ魚住。途端に目を見開く）

魚住「……！！ あっ、意外と……うまっ！？」

トム「だろ！？ スパイシーなカレーと、カリッとしたたい焼きの皮……そしてほんのり甘い後味……まさにエキゾチック・ジャパニーズ・フュージョンだ！！」

魚住「（呆れつつも苦笑）もう……店長のアイデアには毎回びっくりさせられますよ。」

トム「これ売り出して、伝説のたい焼きを作るんだ！いざ、開店だああ！！」

（暖簾をくぐって、開店！さあ、お客の反応は……！？）

---

## 第二幕：飯テロ！お客のリアクション

（店内。最初の客がたい焼きを手にする。

30代OL風の女性）

客1（OL）「グリーンカレーたい焼

き……？ まあ、話のネタに……（パク

リ）」

（目を見開くOL。カレーのスパイスが口  
の中で炸裂し、ココナッツミルクのクリ  
ーミーな甘さが追いかけてくる）

客1（OL）「つつっ！！！！　なにこれ……  
美味しすぎる……！！！」

（思わず涙目。スパイスの香りが鼻を抜  
け、ジューシーな鶏肉が絶妙なアクセシ  
ョンに）

客1（OL）「こんなの初めて……和とエ  
スニックの禁断の融合……！」

（次の客、ガテン系の男性。ゴツイ体格  
の男が恐る恐るかじる）

客2（ガテン男）「おっ……ほおおおお  
お！！！」

（突然、汗が吹き出す。体の芯から熱く  
なるスパイス感）

客ㄣ（ガテン男）「クッソうめええええ！！！」

この辛さと甘さのコントラストがクセになる！汗が止まらねえ！！！」

（客ㄣ、グルメ評論家風の男性が鼻をすすりながら、慎重に一口）

客ㄣ（グルメ評論家）「ふむ……ほう……」

（スパイスの奥深さを感じ取り、沈黙。そして、立ち上がる）

客ㄣ（グルメ評論家）「これは……まさに革命的たい焼き！！」

（拍手が湧き起こる。店内が一気に活気づく）

（客ㄣ、小さな子どもが一口食べる）

客ㄣ（子ども）「うわー、なんか不思議な味……でも、おいしい！！」

（親も驚きの表情）

客（サラリーマン）「このカレーの深み……まさか、ただのたい焼き屋でこんなものが食えるとは……！」

（トム、満足げにガッツポーズ）

トム「YESー！ファニーたい焼き、バカ売れの子感だ！！」

（店の外に長蛇の列ができる。テレビ取材班がやってくる）

レポーター「いま話題の『グリーンカレーたい焼き』、その人気の秘密を探るべくやってきました！」

トム「さあさあ、どんどん食べてくれよ！」

（店は活気づくが、そのとき……店の入り口に現れる黒い影）

カレーの達人「……このカレーはまだまだ甘いな。」

（店内、静寂）

トム「……えっ？」

（達人がスッと前が出る）

カレーの達人「真のカレーの奥深さ

を……お前はまだ知らない。」

（衝撃の言葉に、トム絶句）

### 第三幕：衝撃の訪問者

（突如、店の前に謎の男が現れる。鋭い

目つきで腕を組み、厳しい表情）

（店内が静まり返る。客もトムも絶句）

トム「な、なに……！？」

カレーの達人「貴様、本当のカレーを知らないな。」

（トム、衝撃を受ける。口をパクパクさせながら、やがて真剣な表情になる）

トム「教えてくれ……俺は、まだ本当のカレーを知らない……？」

（カレーの達人、頷く）

カレーの達人「そうだ。本物のスパイスの扱い方、辛さと甘さの真のバランス……お前にはまだ足りない。」

トム「……なら、俺に教えてくれ！俺は……カレーの頂点を目指す！！」

（店内に緊張が走る）

魚住「いやいやいや、たい焼き屋ですよね！？どこに向かうつもりですか！？」

（しかし、トムは目を輝かせてカレーの達人の前に膝をつく）

トム「お願いします！俺に本当のカレーを教えてください！！」

（カレーの達人、腕を組んでニヤリと笑う）

カレーの達人「……いいだろう。覚悟はあるか？」

（トム、力強く頷く）

トム「Yes, Master！！」

## 第四幕：過酷な修行

（広大な山々。霧がかかる神秘的な場所。カレーの達人が腕を組み、トムを見下ろしている。トムはすでに息を切らしている）

トム「ハア、ハア……マスター、カレー修行って……なんでこんなにフィジカル！？」

カレーの達人「フッ、甘いな。真のカレー職人は、体と心の両方を鍛えねばならん。」

（達人、突如トムに巨大なスパイス袋を投げつける）

カレーの達人「この20kgのスパイス袋を担ぎ、この険しい山道を駆け上げられ！」

トム「えええええ！？俺はたい焼き屋なんぞぞ！」

カレーの達人「黙れ！スパイスは生命！それを支える体がなければ、本物の味は生まれぬ！」

（トム、必死でスパイス袋を担ぎ、山道を走る。汗だくになりながらも、一歩一歩進んでいく）

（次の修行）

シーン：崖の上での瞑想

（トム、崖の先端に座らされ、強風が吹き荒れる）

カレーの達人「スパイスの真髄を知るには、まず己の心を研ぎ澄ませねばならん。ここで瞑想し、スパイスの声を聞け！」

トム「スパイスの声……？って、そんなの聞こえるわけ……」

（ゴオオオ！突如、風が吹き荒れる。トム、目を閉じるとスパイスの香りが漂い始める）

トム（心の声）「……あれ？レモングラスの爽やかさ……クミンの香ばしさ……カフイアライムの鋭さ……！」

（トム、スパイスの調和を感じ取り、表情が変わる）

トム「これが……スパイスの声……！」

（カレーの達人、満足げに頷く）

カレーの達人「フッ……よし、次は実践だ！」

## 第五幕：真・グリーンカレーたい焼きの焼きの誕生

（修行を終えたトムが店に戻る。目つきが変わり、オーラが漂う）

魚住「店長……なんか……雰囲気変わりました？」

トム「フフ……俺は生まれ変わった……！」

（トム、新しいグリーンカレーたい焼きを作り始める。その動きはまるで武道家のように鋭く、迷いが無い）

（たい焼きが焼き上がり、中を割ると、黄金のように輝くグリーンカレーが溢れ出す）

トム「これが……『真・グリーンカレー』たい焼きだ！！」

（客たちが試食する。場内、静寂。そして、一人の客が一口食べると……）

客1（OL）「……！！！！」

（突然、涙を流す）

客1「う……美味しすぎる……！辛さと甘みの完璧なバランス……皮の香ばしさと、中のカレーのコク深さ……これ、もはや芸術！」

客2（ガテン系の男）「うおおお！！このスパイスの奥深さ！身体の奥から熱くなる！！」

客②（グルメ評論家）「こんな完成された味が……たい焼きという形で実現されるとは……！」

客④（子ども）「わぁ……辛いのに、おいしい……もっと食べたい！」

客⑤（カレーの達人）「……よくぞここまで来たな。」

（達人、トムの肩を叩き、満足げに微笑む）

カレーの達人「お前のたい焼き、合格だ。」

（トム、ガッツポーズ）

トム「YES！！これぞ、俺のファニーたい焼き魂だぁ！！！」

（店の前に長蛇の列ができる。グリーンカレーたい焼きは伝説となった——）

完

